

～土呂久公害を学ぶ～

高千穂町土呂久地区。この地域には鉍山があり、江戸時代の終わりごろから銀山として栄えました。明治時代以降、砒素を含んだ硫砒鉄鉍という鉍石が見つかり、1920（大正9）年には、採掘した鉍石を焙焼して亜砒酸を製造（亜砒焼き）するようになりました。

亜砒焼きの時に発生する砒素を含んだ煙がこの辺りの山あいにある集落を覆い、土に染み、川を流れました。周囲の竹林はほとんど枯れ、清流に生息するヤマメや蜜蜂は姿を消し、農作物の中には育たなくなるものも出てきました。このように、徐々に土呂久の環境は汚染され、激しいせきや体の発疹が見られるなど、住民の健康もむしばまれていきました。

土呂久鉍山が閉山して9年後の1971（昭和46）年、地元の小学校に勤めるひとりの教諭が、土呂久地区の児童の健康状態がすぐれないことに気づき、土呂久地区周辺の調査を始めると、多くの住民が呼吸器障害などの症状を口にし、また、若くして亡くなった人が多いこともわかりました。

教諭の調査結果が新聞やテレビで報道されたことで、土呂久地区の埋もれていた公害問題が、「土呂久公害」として社会に知られるようになったのです。土呂久で亜砒焼きが始まってから51年後のことでした。

1973（昭和48）年、国は土呂久地区を公害病の指定地域とし、指定疾病を「慢性砒素中毒症」と決めました。宮崎県は住民の健康状態を観察するために、高千穂保健所等に皮膚科や耳鼻科、神経内科などの専門医が出向いて、毎年、健康観察検診を実施しています。

宮崎県は、1972（昭和47）年に最初の慢性砒素中毒患者7人を認定しました。それ以来、認定患者は増え続け、その数は累計で200人を超えています。

2020（令和2）年3月に水質改善工事が終了し、美しい自然環境を取り戻しました。



【戦後の焙焼炉】



【健康観察検診の様子】